

# 倉の内部構造について

倉の規模や基本的な構造については、前頁で簡単に触れましたが、倉の内部はどうなっているのでしょうか。たかつぼ通信第1号の3頁で紹介した磯山地区のOGさん宅の倉を例に見てみることにしましょう。

左の図は上が1階の、下が2階の間取図です。本屋は桁行3間、梁間2間で、桁行の柱間寸法は3.5尺(106cm)、梁間の柱間寸法は3尺(91cm)を測ります。1階は板張りの床に板壁で、下屋との間に頑丈な引戸があります。2階への階段は倉の裏口にあります。本来は引戸

近くがあり、2階の改造に伴って移されたと思われます。

下屋は1間幅の規模で、壁は漆喰塗り、床は土間になっています。下屋の入口側には板で仕切った米入れが設けられています。下屋の先にはさらに1間半の孫庇が掛け渡され、物置が増設されています。

2階は居住用に改造されており、板壁で2間の畳敷の部屋、廊下、押入があり、4畳半の部屋の中央には炉が切られています。階段側の部屋には東側に明かり取り用の窓の下に、さらに腰窓が設けられ、居住用に改造されたことを示しています。なお、階段は引蓋で閉じられるようになっていきます。

# 水塚測量調査(2)

今年度も委託による水塚の測量調査を行いました。今回は磯山地区にあるIKさん宅の裏に築かれた、本来倉がない土盛りだけが築かれた水塚を選びました。左の図が、その成果です。

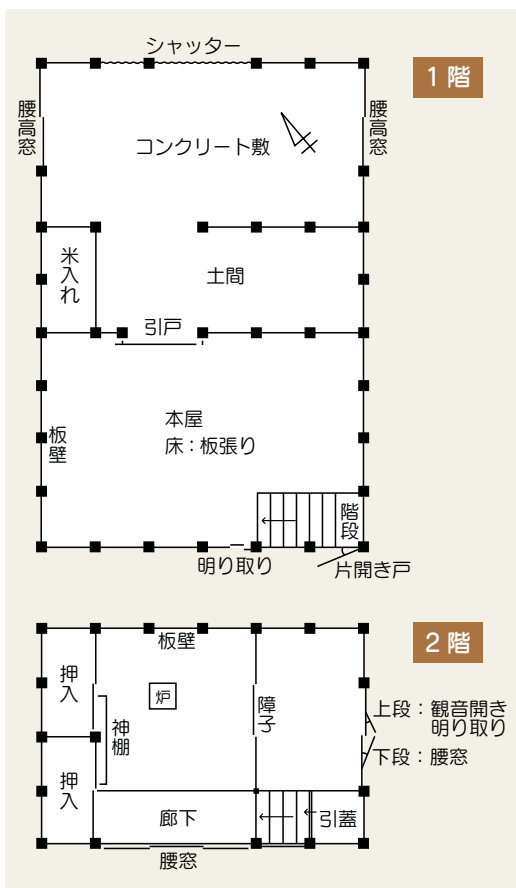
この山はオタスケ山という名で呼ばれていますが、呼び名の由来は後に紹介するとして、まず形や規模などを見てゆきましょう。

長軸を北東―南西に持ち、四隅がやや丸みを帯びた長方形をしています

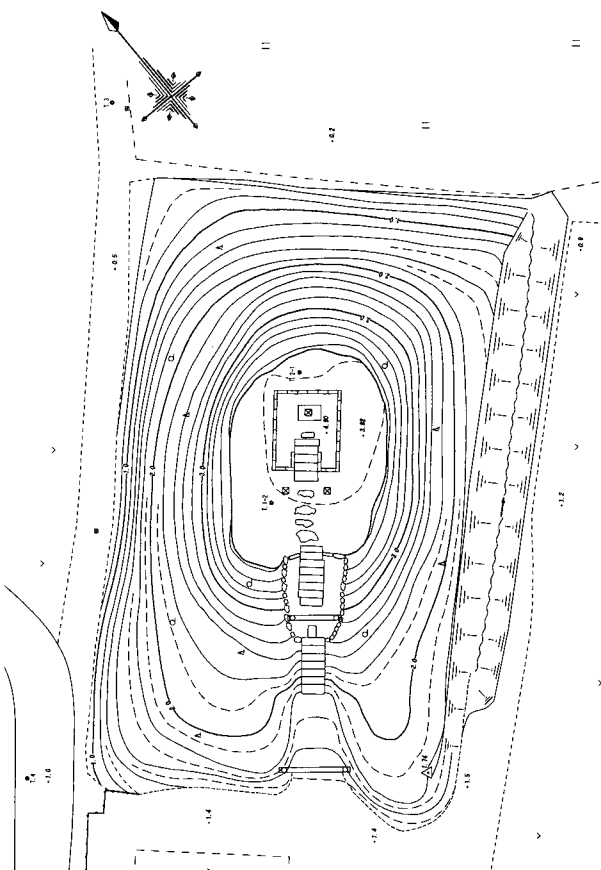
す。南東側の長辺にそって畑の排水溝が掘られていて、山のすそ部分が壊れています。大きさは長軸約25m、

短軸約15.5m、高さは25mあります。頂は標高3.9m、平坦にならされて、土盛りの中心からやや奥まった所に稲荷の小祠がさらに1m高く祀られています。祠の前には灯籠が両脇にあります。さらに祠から山すそに向

かって石畳と階段が設けられ、山すその中腹にそれぞれ鳥居が建てられています。4頁の写真のように山全体に常緑樹の大木が茂っていて、この山の古さを物語っています。なお、山の南側のすそに国土地理院により



▲ OGさん宅倉間取図



▲ IKさん宅水塚測量図 縮尺：1/300

三角点が設置されていますが、昭和39年から始まった十六島地区の土地改良の際に基点となったといえます。

IKさんのお話では、この山は水害時の避難場所として設けられたようですが、もう一つの目的は水害による不作の際、小作の人々の救済措置として、舟で土を運んでもらい、その代償として米飯を渡したことからオタスケ山と呼ばれるようになったそうです。なお、IKさんの家は磯山開起7人のうちの一人、飯田氏の次男の家系で、やはり三男の家系の加藤洲Yさんの屋敷地内にも土盛りの水塚があつて、水塚の形態に血縁関係も関連していることが指摘できるかもしれません。



▲オスタケ山遠景

## 十六島新田の成り立ちと歴史②

前号で紹介した寛文三月十八日付の古文書は、その後続く新島の新田開発関係文書の筆頭に位置付けられることが多い有名なものですが、検討の余地があります。この寛文を多くの文献は天正十八(一五九〇)年としています。この年は確かに後北条氏が滅亡し、家康の関東移封があつた年ですが、秀吉が京から小田原攻めに向かったのが三月一日、沼津着陣が三月二十七日です。常陸・下総ではまだ北条側との戦端も開かれていません。このような情勢の中で家康の代官がこうした内容の文書を発給することはありえないことでしょう。この文書の日付は少なくとも家康の関東入部の八月一日以降でなければなりません。

しかし、その後位置付けられる文書群から見て、天正末から文禄初めにかけて十六島の開発が始まったのは間違いないようです。

新嶋被相立候地形者、河内上者新川を切而、下者牛堀川尻迄相定候、

御豊饒御印形之儀者、重而申請可進候間、先早々被引立被相移候、以上

卯極月八日 栗飯原左衛門印

吉田佐太郎印

石田主馬允殿 (山来家文書)

この文書は新嶋の範囲を定め、移住を督促したものです。卯年とあるのは、おそらく天正十九年で、石田主馬允を代表とする土岐氏の旧家臣団に対して発給されたものと思われます。また、翌年と思われる次のような文書もあります。

猶以右の外他郷より之入作、其嶋所能様二口入才覚、畢竟其方任置候一 右當谷地新田ひらきの事、五ヶ年之間、聊相違有間敷事、為其一筆渡置候、以上

辰二月吉日

吉佐太印

栗飯左印

石田主馬允殿 (山来家文書)

下総国新嶋新田をこし候上者、年貢之外諸役等御座有間敷候間、右之段可被仰付候、已上

辰三月八日

大十兵印

吉田佐太郎殿 (山来家文書)

このように新嶋の開発を一任され、年貢や雑役免除の特権を得て土岐氏の元家臣団による開墾が始まります。まず、現稲敷市(旧東町)の上ノ嶋、西代(弁島を含む)、八筋川が開かれました。西代は山来五郎衛門が文禄三(一五九八)年(一説に天正十九年)に、八筋川は大堀佐兵衛が慶長五(一六〇〇)年(一説に天正十九年)に開起しています。なお、2番目の文書の太十兵とは家康の重臣であつた代官頭大久保長安です。

徳川氏による新嶋開発の重視は前号でも触れたように佐竹氏に対する領土防衛という政治的理由によるもので、佐竹氏を怨む土岐氏旧家臣団をこれに利用したといえるでしょう。

【参考文献】和泉清司1999  
「江戸幕府代官頭文書集成」



編集後記

たかつぼ通信第2号をお届けします。22年度は境島・三島・大島・八筋川地区に入ります。地元の皆様、よろしくお願いたします。

(西)